

実習受け入れの肯定的・否定的感情と 実習指導者の意識との関連性について

On the Relation between Positive and Negative Feelings for Accepting Practical Trainees and Consciousness of Practical Instructor

吉牟田 裕 関 好博 立島 真 石橋 郁子
井上 理絵 小平 達夫 西井 啓子

YOSHIMUTA Yutaka SEKI Yoshihiro TATSUSHIMA Makoto ISHIBASHI Ikuko
INOUE Rie KODAIRA Tatsuo and NISHII Keiko

【要約】

介護ニーズの複雑化・多様化・高度化に対応するために、養成課程で学んだ知識と技術を領域「介護」で統合し、アセスメント能力を高め実践力の向上を図る目的から、「介護過程の実践的展開」、「多職種協働の実践」、「地域における生活支援の実際」が追加され、今後ますます介護実習の中で指導者に求められるものが多くなることは必然である。したがって、指導者の実習指導に対する意識の現状を明らかにし、解決のための方策を探ることが重要となる。そこで、実習受け入れの感情面と実習指導者の意識の関係性を明らかにすることとした。本学の実習指導者講習会に出席した実習指導者のうち、実習指導経験のある指導者を対象に調査を行った。実習受け入れに対する肯定的・否定的な感情により3つの群に分け、感情と実習生へのとらえ方、実習中に意識している点に注目した結果、実習生受け入れの肯定的・否定的感情には、実習におけるPDCAサイクルへの意識が関わっており、PDCAサイクルを意識した実習計画を立案することが求められることがわかった。

キーワード 介護福祉士 介護実習 実習施設 介護実習指導者 PDCA

はじめに

介護実習の目的は、「実践を通じて各領域で習得した知識と技術の統合を図ること」、「介護福祉士の役割を理解し、自らの介護観を形成すること」と、「自己評価力や計画力を高め、自己教育力を養うこと」の3つである（川延 2008：200）。安酸（2015）は、看護師養成教育の経験をとおして、実習とは「学内の講義や演習では学べないことを、有形・無形に学ぶ機会にあふれている」と、広範な成長を育む教育の場であると述べている。介護福祉士養成

2年課程において介護実習は、実践の場での450時間の介護実習を行うことが必要要件となっている。これは、全養成時間(1850時間)の4分の1を占めている。この介護実習では、学生に直接助言・指導を行う介護実習指導者(以下、指導者)の役割は大きい(荒木ら2015:90-92)。

筆者らの先行研究として、石橋ら(2016)は介護実習における学生への指導者の意図的な関わりの一つとして「実習予定表」に焦点をあてた研究を行った。その中で、学生は予定表によって実習への意欲を喚起し、指導者への信頼関係の醸成に繋がっていることと、予定表が有意義な指導ツールになっていることを明らかにした。さらに、予定表が個々の学生に応じたものになるように指導者との検討を重ねることの必要性を提言した。荒木ら(2014)は、「指導者の役割として、個々の実習生への対応だけではなく、各施設・事業所等のサービス提供の確保・経営にむけた職員の質の担保、さらにはわが国における高齢者・障害者への介護力の確保に繋がるという大切な社会的役割を担っていると自覚しなければならない」ことをあげ、指導者の質を問う現状があることを指摘している。また、指導者の意識に関して福田ら(2018)は、指導者自身が学生の指導のあり方に悩み、実習指導に行き詰ることが誘引となり、実習指導に自信を持たなくなっている指導者もいる現状と課題について示唆している。

平成31年度より順次導入される「介護福祉士養成課程の教育内容の見直し」(厚生労働省2018)では、介護実習で新たに教育に含むべき事項として「介護過程の実践的展開」「多職種協働の実践」「地域における生活支援の実際」が追加される。今後ますます介護実習の中で指導者に求められるものが増えることは必然である。学生が介護実習において各領域で学んだ知識と技術を統合し、介護実践に必要な観察力・判断力及び思考力を養うためには、指導者の導き方が重要であることは間違いない(荒木ら2014)。そこで、指導者の実習指導に対する意識の現状を明らかにし、実習指導の課題解決の方策を探ることが重要となる。

I. 研究目的

介護実習における指導者の実習受け入れの肯定的・否定的感情と意識の関連性を実習指導の課題を明らかにすることを目的とする。

II. 研究方法

1. 調査日：第1回 2018(平成30)年6月6日(水)
第2回 2018(平成30)年8月2日(木)
2. 調査対象：本学における介護実習指導者 104名
3. 調査方法：アンケート調査

本学にて実施した介護実習指導者会議・研修会の会場において、社会福祉法人 ひだまり 理事 山下 総司氏による講演「学生の個性を伸ばす実習環境のあり方」の

ちにアンケート用紙を配布し、その場で回収した。同じ内容で 2 回開催された介護実習指導者会議・研修会で調査を行った。

4. 調査項目：下記の 14 項目である。

- ① 年代、②性別、③介護職としての勤務年数、④実習指導者研修終了の有無、⑤富山短期大学での実習指導者経験、⑥担当実習、⑦実習体制・指導者人数、⑧実習生の受け入れに対する肯定的評価、⑨実習生の受け入れに対する否定的評価、⑩実習生のとらえ方、⑪実習指導の中で意識する点、⑫実習生について感じている課題（自由記述）、⑬実習指導において指導者自身が感じる課題（自由記述）、⑭講演会を聴取後の学生を育てることへの考え（自由記述）

5. 分析方法：回答者の中から、富山短期大学の実習指導経験のある者を分析対象として抽出し、単純集計およびクロス集計を行った。

6. 倫理的配慮：倫理的配慮：無記名で自書式とし、個人が特定されないよう全て統計処理をおこない、結果は本研究以外に使用しないことを口頭で説明し、了解を得たうえで実施した。

Ⅲ. 結果

アンケートの回答者は 104 名で、有効回答率は 100% となった。回答者のうち、男性 22 名(21.2%)、女性 101 名(97.1%)、不明 3 名であった。分析対象は、この中で富山短期大学実習指導者の経験に「あり」と回答した 59 名のみを対象とした。分析対象のうち、男性 13 名(22.0%)、女性 45 名(76.3%)、不明 1 名(1.7%)であった。

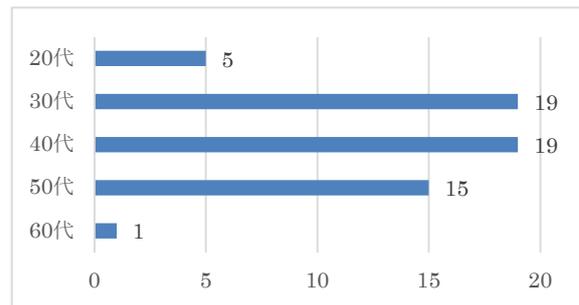


図 1 指導者の年代

1. 指導者個人の属性

指導者個人の年代を図 1 に、介護職としての勤務年数を図 2 に示す。実習指導者研修修了者は 48 名(81.4%)、未修了者は 10 名(16.9%)、不明 1 名(1.7%)であった。実習指導者としての経験のある者の通算経験年数を図 3 に示す。これまでに、指導者が担当したことがある実習の内訳を表 1 に示す。

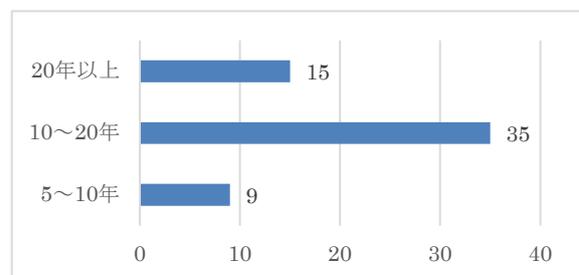


図 2 介護職としての勤務年数

表 1 指導者が担当したことがある実習の内訳

		実習の種類(科目)					度数
		基礎 画	介護 計	介護 過	総合	(人)	
担当回数	1	○	-	-	-		2
		-	○	-	-		3
		-	-	○	-		5
		-	-	-	○		15
	2	○	○	-	-		1
		○	-	○	-		2
		○	-	-	○		2
		-	○	○	-		0
		-	○	-	○		0
		-	-	○	○		3
	3	○	○	○	-		8
		○	○	-	○		0
		○	-	○	○		0
		-	○	○	○		0
	4	○	○	○	○		12
	不明						6

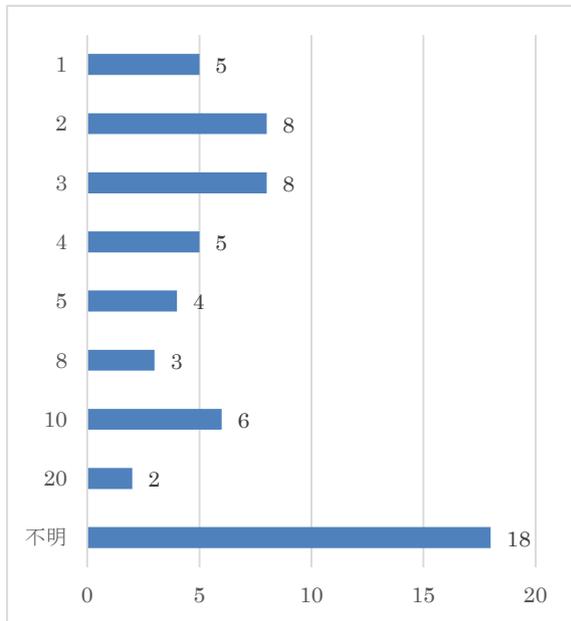


図 3 富山短期大学実習指導者経験通算年数

2. 実習指導体制および実習生の受け入れについて

実習施設の実習指導体制について、指導者の配置人数は、1名のところが7件(11.9%)、複数名のところが50件(84.7%)、不明が2件(3.4%)あった。

実習生を受け入れる際の指導者の感情について、「実習生の受け入れを楽しみに思うか」「実習生の受け入れを辛いと思うか」をクロス表として表2に示す。表2において、各設問への回答を「非常に思う・思う」と「あまり思わない・全く思わない」で分け、4つの群に分類した。A群は実習生の受け入れを楽しみかつ辛いとは思わない群で、最多の37件(62.7%)、B群は楽しみかつ辛いと思う群で11件(18.6%)、C群は楽しみとも辛いとも思わない群で2件(3.4%)、D群は楽しみと思わず、辛いと思う群で9件(15.3%)であった。

表 2 指導者の実習生の受け入れに対する感情

		実習生の受け入れを楽しみだと思えますか				
		非常に思う	思う	あまり思わない	全く思わない	合計
実習生の受け入れを辛いと 思えますか	非常に思う	0	0	0	0	0
	思う	1	10	9	0	20
		B 群 11(18.6%)		D 群 9(15.3%)		
	あまり思わない	6	25	2	0	33
	全く思わない	3	3	0	0	6
		A 群 37(62.7%)		C 群 2(3.4%)		
	合計	10	38	11	0	59

3. 実習生のとらえ方、実習指導中に意識している点

実習生の受け入れへの感情面と、実習生のとらえ方や実習指導の意識に対してどのような影響があるかを分析した。表 2 において分類した A-D 群のうち、C 群は 2 件と寡少なため、分析の対象から除き、残る A、B、D 群を比較した。

A・B・D 群で比較した実習生のとらえ方を図 4 に示す。設問には、その他（自由回答）があったが、3 群とも選択した者がいなかったため、図からは割愛した。同じく、指導者が実習指導中に意識している点を図 5 に示す。

IV. 考察

1. 実習指導者の傾向

今回の調査では、本学学生への実習指導者としての経験「あり」と回答した 59 名について分析を行った。指導者の年代は、30～50 代が 89.8% と大部分を占めた(図 1)。介護職としての勤務年数 10 年以上が 84.7% と多く(図 2)、実習生を指導するキャリアを積んだ職員が指導を担当していることがうかがえる。

その一方で、実習指導者としての経験の通算年数では、50.8%が 5 年以下と回答しており、各施設において、一人の指導者が長期にわたって特定の養成施設の実習生を担当するわけではないことを示唆している(図 3)。

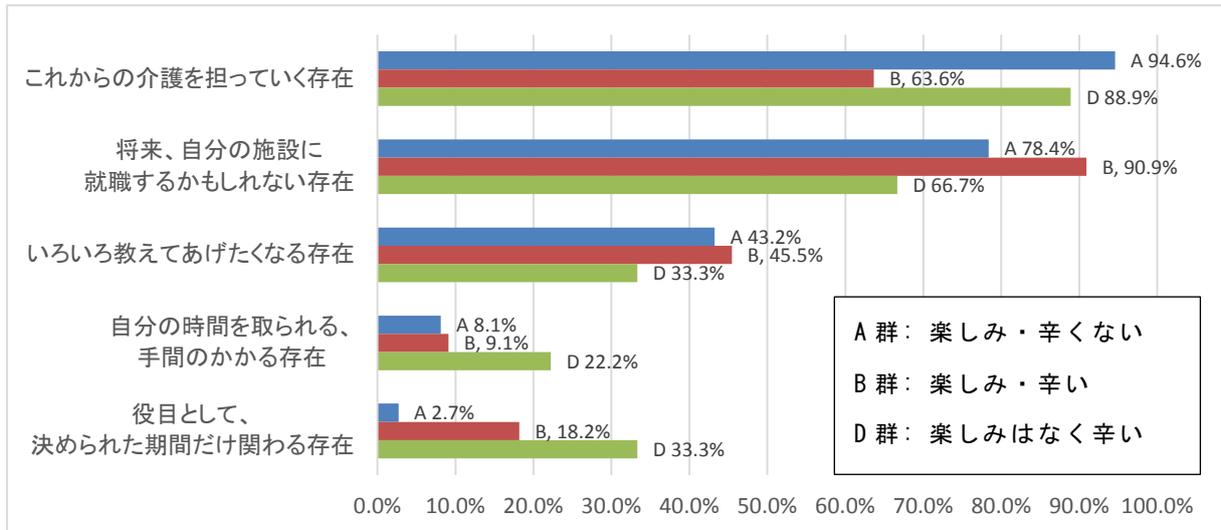


図 4 指導者の実習生に対するとらえ方 (A・B・D 群比較)

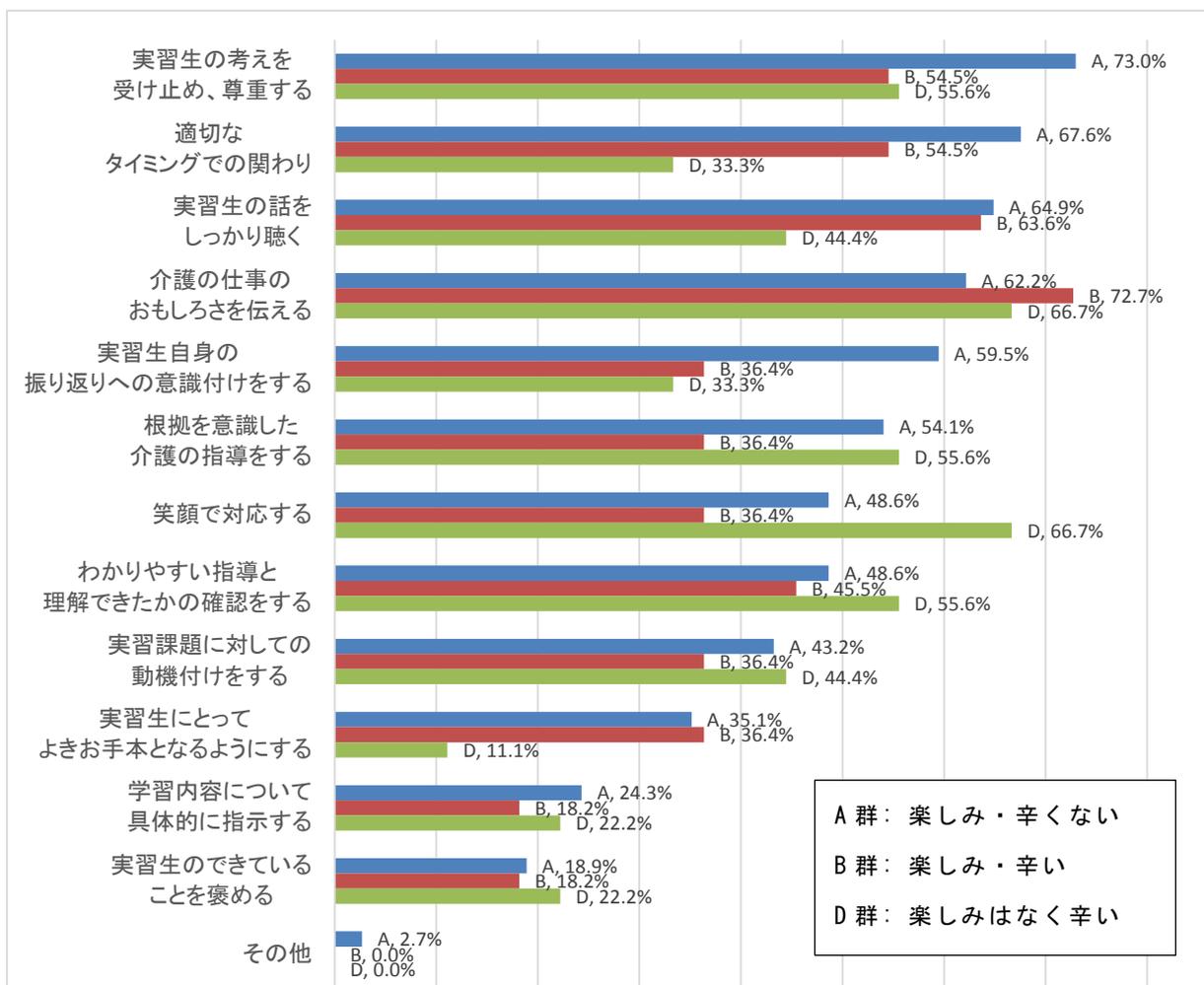


図 5 指導者が実習指導中に意識している点 (A・B・D 群比較)

指導者が担当したことのある実習(表 1)では、総合実習だけの担当経験者が 15 名(25.4%)で最も多かった。ただし、総合実習は、グループホームや小規模多機能型施設など、総合実習のみで実習対象となる受け入れ施設が含まれていることを考慮する必要がある。次いで、基礎、介護計画、介護過程、総合の全実習を担当したことがある指導者が 12 名(20.3%)と多く、実習を一通り経験した職員を指導者とする傾向が見て取れる。

2. 実習受け入れの肯定的・否定的感情と実習指導者の意識

表 2 の A 群～D 群までの「楽しみ」「辛い」といった指導者の感情面の違いと、指導者の実習生のとらえ方の関係を見ると(図 4)、A 群と D 群は約 9 割が「これからの介護を担っていく存在」と考え、B 群は「担い手」よりも「将来、自分の施設に就職するかもしれない存在」という自施設を意識した回答となっている。また、「いろいろ教えてあげたくなる存在」など、実習生を将来の介護人材として育む姿勢については各群の間での差異は見られない。D 群には「自分の時間を取られる、手間のかかる存在」「役目として、決められた期間だけ関わる存在」というように、指導にかかるコストを嫌う傾向や、指導へのモチベーションの欠如が見られた。B 群は、「役目として、決められた期間だけ関わる存在」が A 群・D 群の中間的な位置にある。どの群の指導者も、実習生の受け入れへの意義・育成意識は同様にあるものの、仕事上でのコストと指導へのモチベーションの差異により「楽しみ」「辛い」の感情面を生じさせているのではないだろうか。

A 群～D 群までの「楽しみ」「辛い」といった感情面での違いと、指導者が実習中に意識している点の関係はどうなっているかを分析してみた(図 5)。実習生の受け入れを「楽しみに思い、辛いとは思わない」A 群と「楽しみとは思わず、辛いと思う」D 群を比較すると、A 群では「実習生の考えを受け止め、尊重する(73.0%)」「適切なタイミングでの関わり(67.6%)」「実習生の話をしっかり聴く(64.9%)」「実習生自身の振り返りへの意識付けをする(59.5%)」「実習生にとってよきお手本となるようにする(35.1%)」点を強く意識している。一方、D 群では、「笑顔で対応する(66.7%)」「わかりやすい指導と理解できたかの確認をする(55.6%)」点を強く意識している。B 群は、項目により A 群と D 群のいずれかと同じ傾向を示し、ここでも A 群と D 群の中間的な傾向を示している。ただし、「根拠を意識した介護の指導をする」点が A・D 群よりも低くなっているところに特徴がある。

A 群は実習生の考えを受け止めて(PLAN)、タイミングよく関わり(DO)、振り返りへの意識付けをする(CHECK、ASSESSMENT)ことにより、実習の PDCA サイクル全体へのサポートがなされているのに対して、D 群は「笑顔」で「理解の確認」はするものの、PDCA サイクルにあまり深くかかわっていないように思える。「理解の確認」は、あくまでも実習指導者が実習生の理解度を確認するものであり、実習生自身の振り返り(CHECK、ASSESSMENT)ではない。

3. 介護実習の PDCA サイクルと実習指導

学生が介護実習において各領域で学んだ知識と技術を統合し、介護実践に必要な観察力・判断力及び思考力を養うためには、指導者の導き方が重要であることは間違いない(荒木ら 2014)。筆者らの先行研究として石橋ら(2016)は、予定表は学生の実習への意欲を喚起し、指導者への信頼関係の醸成に繋がっていることと、予定表が有意義な指導ツールになっていることを明らかにした。介護実習の成果を高めるためには、事前に個々の実習生にあった、実習の PDCA サイクルを意識した実習計画を立案することが重要である。PDCA サイクルを意識した実習計画により、指導者が実習受け入れへの肯定的な感情を持つとともに、実習全体が充実したものになることが期待される。

まとめ

- 指導者は、実習生を将来の介護人材としてとらえ、受け入れへの意義・育成意識を持っている
- 実習生受け入れの肯定的・否定的感情には、実習における PDCA サイクルへの意識が関わっている
- PDCA サイクルを意識した実習計画を立案することが求められる

引用文献

- 1) 荒木隆俊、伊藤和雄、松田水月「介護福祉士養成に伴う、教育現場と介護現場の役割と連携(1)」、羽場学園短期大学紀要 第9巻 第4号 2014
- 2) 荒木隆俊、伊藤和雄、松田水月、宮地康子「介護福祉士養成に伴う、教育現場と介護現場の役割と連携(2)」、羽場学園短期大学紀要 第10巻 第1号 2015
- 3) 安酸史子「学生とともに創る臨床実習指導ワークブック」医学書院 第2版第12刷 2015
- 4) 石橋郁子、関好博、井上理絵、松居紀久子、西井啓子「実習予定表のあり方と課題」富山短期大学紀要第54巻 2018.3
- 5) 川廷宗之編「介護教育方法論」弘文堂 初版1版 2008 p 200
- 6) 厚生労働省「第13回社会保障審議会福祉部会福祉人材確保専門委員会資料2」2018.2.15
- 7) 福田明、栗栖照雄、渡邊一平、横山奈緒枝「介護実習指導者の「自信のなさ」に関する要因と改善に向けた課題の研究一面接調査結果のテキストマイニングによる分析を通して」最新社会福祉学研究 第13号 2018
- 8) 澤田信子、小櫃芳江、峯尾武巳編「改訂介護実習指導方法」全国社会福祉協議会 2006 P156-P157